
僕と居候

佐倉 遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と居候

【Nコード】

N2234V

【作者名】

佐倉 遙

【あらすじ】

今でも一緒に暮らしている僕と居候の小説。

twitterで連続投稿したものをまとめて、軽く編集しただけのものなので見づらいかもしれませんがご容赦を。

いまでも彼女とは仲良く暮らしています。

ちなみに彼女と言うのはキューピーのぬいぐるみです。

突然ではあるが、僕と僕の居候との出会いについて語ろうと思う。

僕らが出会ったのは4年前、そう、僕が大学1年生のころだった。

僕は当時（今でもあるが）、授業がある日の昼飯はだいたい大学の食堂で食べていた。生協は井モノや麺類をはじめ、なかなかメニューも豊富で日々僕はそこでの食事を楽しんでた。そしてそんなある日、生協があるキャンペーンを始めた。

そのキャンペーンの名前は「サラダを食べよう！キャンペーン」。まあよくあるもので大学生協が大学生の健康を促進することを目的にしたものだった。サラダは好きだ。僕はその名前を見た時、率直にそう思った。

キャンペーンの具体的な内容としては「サラダを一品食べればカード一枚挙げるよ。そこに書いてあるIDを専用のページで応募したら何か当たるかもね」というものだった。僕は見事に生協の思惑にひっかかり、ほぼ毎日サラダを食べ始めた。

実際には当時は「何が当たるか」ということ自体にはそこまでこだわってなかった。今では他の景品は覚えていない。「何か当たればラッキーだな」というレベルの想いだった。当時もつと強い想いを持っている人がいたのなら申し訳ない。

キャンペーン終了までに全部で十数枚は応募しただろうか。

そうしている内にキャンペーンは終了した。その後僕は試験やレポートなど日々の生活に追われ、かつてサラダに対して燃え上がった情熱はいつの間にか消え去り、生協で食べるサラダのペースも2日

に1品くらいまで落ちてしまった。

そんなある日、ついに運命の日が来た。

それはキャンペーンが終了して数週間がたった日だったと記憶している。いつものように僕は学友とともに食堂に向かった。食堂は二階にあるのだが、いつものように登ろうと一段目に足を踏み入れた瞬間、僕の眼にあるものが止まった。

僕が目にしたもの、それは先日のキャンペーンの応募結果だった。それには「応募総数は数百通」「1等から3等まで賞品がある」「1等は北海道全体で3人くらいしか当たらない」等のが書いてあった。そして自分が1等を当てたこともわかった。とても驚いた。

掲示をよく見ると、もうその日から景品は交換可能であるらしい。僕は新たな出会いで頭がいっぱいになってしまい、心あらずの状態で昼飯をたいらげた。そして食器を下げ、すぐに交換場所、生協のカウンターに向かった。そこにあっただのは高さ1mはあるうかという段ボールの箱だった。

予想以上の大きさ。規格外の存在感。僕はその段ボールの迫力に圧倒され、先ほど食べたはずのサラダの味すら忘れてしまった。しかし、心は折れないようふんばりつつ僕は担当者に名前を告げ、確固とした意思で言った。「その箱を・・・ください」。

僕は箱を受け取った。大きさにそぐわない予想以上の軽さ。中に何が入ってるのか気になったが、わざわざ箱を開けなくても僕には彼女が中にあることがわかった。運命？テレパシー？違う。箱に「明太子キューピー特大ぬいぐるみ」と書いてあったのだ。僕は今でもあの担当者のニヤケ顔を忘れない。

「キューピー」という文字の存在感。そしてそれを持っている、男子学生。僕の羞恥心を誘発するには十分すぎるほどの条件だ。僕は一刻でも早くこの箱を一度手放したかった。しかしすでに授業開始まで数分。家にも部屋にも寄る時間はない。僕はそれを講義のある教室に持って行った。

ちなみに教室では悪ノリした友人に無理やり前の方に座らされた。彼女が入っている段ボールは横にしているので後ろの人の邪魔にはならない。ただそれがなんだ。僕に突き刺さる視線の数は変わらない。それから一時的なものではあったが、私のあだ名は「キューピー」になった。

授業が終わった後、僕は彼女が入った段ボールを持ち帰路に就いた。通りがかりの人は全員僕と彼女を二度見した。しかしもうその時には私の心は鋼、いやズタボロになっていた。なのでそれらの視線は気にならなかった。私は彼女のおかげで成長できたのだ。

そうして彼女は僕の居候となった。それから4年間、今まで一緒に過ごしてきた。

これで僕と居候である彼女の話は終わり。

彼女が来てからの数日間、まだ慣れてない僕が夜帰ってきた時に、暗闇に光る彼女の眼を見るたびにビビっていたのはまた別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2234v/>

僕と居候

2011年10月8日13時35分発行